

言語

部長 教授 大熊 信行

卷

頭

言

杉浦重剛先生の『倫理御進講草案』によれば、第三學年第二學期において外國の偉人を説かれたなかに、くはしくワシントンの事蹟を述べられたが、ワシントンが『社交並に會話の法則』と題して百ヶ條あまりの事を手帖にしておいたそのなかの九ヶ條を拔萃されたとある。いま、その六番目の『言語』と註するものを見ると、曾て少年のころ、たしかに讀んだおぼえのものであるが、ひどく心にしむのは不思議である。それは杉浦重剛先生の譯文となつて、かうある。——『語る前に考へよ。不完全に語る勿れ。口早に語る勿れ。明瞭に順序正しく語らざるべからず。』これは言語について一つのことをいつてゐるやうであるが、しかし、わければ四つにわけられるであらう。第二と第四とは、ほとんどおなじことのやうにもうけとれるけれど、ふかく考へれば場合がちがふとおもはれる。また第一は、つねにさうばかりもいへず、まへかたから何をいはうと思はないことがよい場合もあるのは聖書の言葉をひくまでもないであらう。

たゞ一つ、『口早に語る勿れ』といふ一句である。ワシントンは早口はやぐちのひとつであつて、みづから戒めるためにさうしるしたのか、他人の早口がきくぐるしく感じられてさうしるしたのか、あるひは双方なのか、それはわからない。たゞ、『口早に語る勿れ』といふ平凡な一句が、まるでこの一條の眼目でもあるかのやうにひびくのである。

人類が文化の發達とともに全體として口早になりつゝあるのは必然のことであらう。正確に測定されず記録されてゐないことではあるが、この傾向はうたがひやうがないのである。おもなる原因の一つとして人間が印刷された文章を速力をもつて默讀するといふ近代的な習性のあることも否定できないのである。

それはたしかにさうであらう。人類は全體としていよく早口になりつゝあり、都市居住者は田舎者よりもつねに早口であらう。にもかゝらず、『口早に語る勿れ』といふワシントンの戒律は永久の戒律である。

早口はかならずしも言葉の速度ではない。心の状態である。心がおちついた状態で走つてゐるならば快速度も時によつて結構であらう。『口早に語る勿れ』といふ戒律は心の戒律であるために身にしむのであらうとおもふ。